

経歯槽頂上顎洞挙上手術への 回転式器具の定型化への試み

Standardization of the reamer devices for tanscrestal maxillary sinus lift



室木 俊美

医) 室木口腔外科医院 口腔インプラントセンター

村井 正寛 医) 室木口腔外科医院 口腔インプラントセンター

山崎 一人 デンタルオフィス山崎

松原 五郎 まめだ歯科医院

高倉 洋一 和田精密歯研株式会社

【目的】経歯槽頂上顎洞挙上手術（以下：本法）は低侵襲とされているが、術式の盲目的に加え専用器具の不足から定型化されていない。今回鏡視下所見を参考に本法における術式の標準化について検討したので報告する。

【対象】Hatch Reamer[®] (Sinus Tech, Korea)を使用して本法を行った2009年10月から2016年12月までの119症例148本を対象とした。検討内容は、洞粘膜の損傷を①開洞時、②剝離時、③インプラント体埋入時の各段階において調査した。症例では、Class1（埋入部位の垂直的距離0-3.9mm）：43例・56本、Class2（4-6.9mm）：56例・71本、Class3（7-9.9mm）：19例・20本、Class4（10mm）：1例・1本で検討した。

【結果】Class 1における洞粘膜の損傷はそれぞれ①では、0本、②は4本、③は1本であり、Class2は、②で1本であり、Class3と4では認められなかった。

【考察および結論】本法の定型化には開洞用器具と剝離子の選定が重要であった。